

里山・里海フォーラム

さとやま・さとうみからの贈り物

日時：2016年5月21日（土）13：30～16：30

場所：銀座教文館 9F ウェンライトホール

第1部 講演 井上恭介氏

NHK エンタープライズ エグゼクティブ・プロデューサー

第2部 ワークショップ 大浦佳代氏

海と漁の体験研究所 代表



「里山・里海フォーラム」
さとやま さとうみからの贈りもの

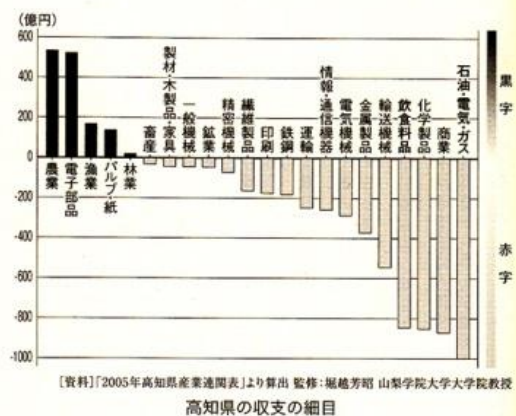
講師：井上恭介さん NHK エンタープライズ エグゼクティブプロデューサー

「里山資本主義」という言葉を作られた井上さんだが、「この言葉、ちょっとひっかかりますよね」ということからお話しが始まった。実はその前に「マネー資本主義」という言葉があったそうだ。2008年にリーマンブラザーズという証券会社の破たんが、世界中の経済を混乱に陥れた、それはどうしてだろう？よく聞いてみると、頭のいい学者や経済人たちの誰もが「このままいくとは思えなかった」と言っていた。どこかがおかしいのではないだろうか。NHK スペシャル「マネー資本主義」のきっかけだった。

思い込みがそのまま進んで行ってしまうということは、よくあることで、例えば貿易赤字が最も多い高知県で詳しく見ると、農業、漁業など生産物ではお金が入るが、エネルギーや加工されたものでは赤字になっている。家計のやりくりでもそうだが、こういう時は赤字を減らせばいいのだが、エネルギーを自給するという発想がないのだ。昔はどこでも自分でまかなっていたのに・・・

そこで登場するのが、木を切っている男性（和田さん）。エコストーブを作成して、それでご飯は全部炊いている。この時は写真用に木を切ったのだが、実は木を切る必要もなく、そこらへんにいくらでも落ちている小枝でも用が足りる。エネルギーの支出はゼロ、これで節約できるのは月 2000 円程度のものだそうだが、金額の問題ではなく、できたご飯のおいしさは抜群とか。井上さんは世田谷在住だが、このエコストーブで週 1 回はご飯を炊いておられるそう。燃料は、通勤途上に落ちている小枝や松ぼっくりなどで。

次の写真は製材所のおがくずで発電をしている社長の中島さん。林業が落ち込んで多くの製材所が閉鎖を余儀なくされた時、銀行から「もっと大量生産するような施設を入れたほうが良い」、などのアドバイスを受けた中島さんは、「いや、木を全部使い切りたい」と、製材廃棄物のおがくずを使う発電所を作ったのだ。すると製材につかう電気代が浮いただけでなく、年間 2 億円もしていたおがくずの処理代も必要なくなり、経営もうまく回るようになった。もともと何代か前の日本人は山の木を無駄なく使い切っていた、その遺伝子は岡山の人達の中に今も流れているのだろう。おがくず発電だけでなく、おがくずをペレットにすると製材所以外の場所でも使える。真庭市ではこのペレットを役所や小学校でも使っているし、近隣のビニールハウスでも使うようになった。使ってみれば石油よりも安く、グローバル経済（石油価格の乱高下）に影響されずに一定の価格で供給されるので喜



ばれている。また真庭市では1万5000キロワットの発電所も作ってしまった。ここでは山の間伐材、落ちた枝、剪定枝なども受け付け、多少の対価で引き取るので、近所の人たちが軽トラで木を持ってきたり、なかには一日に5回も持ってくるおもしろいおじさんもいるそうだ。山に人が入って、山が生き生きしてくる、自分たちも利益が得られるということだけでなく、そのことで今までエネルギーの代金として地域の外に出て行っていたお金が、自分のところでまわって蓄えられるということで地域全体が活性化してくるという。材木の使い方として、木を組み合わせる CLT 工法というのがあるが、海外では CLT を使って 24 階建てのビルまでできているそうだ。

あまり熱心に話してくださったので、里海の方の話に行くまでにはほぼ時間が尽きてしまったのが残念だった。でも、最後に見せてくださったのはアマモの根元にコウイカの卵がついている写真だったが、卵の中にコウイカの赤ちゃんらしきものが透けて見えた。井上さんはしっかり赤ちゃんの存在を確認されたとのこと。昔は公害で死の海となり、遊泳も禁止されたほどの海が人の手でよみがえり、イカの卵が産みつけられるようにまで回復したというのはうれしい話だった。

講演後の質問

1-1. ペレットを燃やす場合と重油を燃やす場合では、でてくる煙の成分に違いはありますか。

今の技術であれば、完全燃焼すれば恐らく木材も重油も自然に悪影響を及ぼすものは殆ど何も出ないというところまで来ていると思うので、その点ではあまり変わらないのでは。ただ、中島さんが発電所のもちが良いと言っています。私のエコストーブもまだまだ使えます。木のほうがやさしく燃えるといえるのかもしれませんが。

1-2. 今、製材所の発電量はどのくらいでしょうか。

調べないと、今すぐに発電量がどのくらいかはわからないが、大事な点は発電量が多いか少ないかではない。いろいろな場所でその場所にあった小さい発電所がいっぱいできて、その場所の電気をまかなうというのがいいのではないのでしょうか。

2. エコストーブは作り方を教えてくれるところがあるか、また費用はどのくらいでしょうか。

一番簡単には和田さんの所では毎月講習会を開いているが、神奈川あたりでもネットで調べれば教えてくれる人はいると思います。費用は5000円程度くらいでできます。

ワークショップ

講師：大浦佳代さん 海と漁の体験研究所

8つのテーブルにはいろいろな貝殻、サンゴ、プラスチックパイプなどが並べられ、その周りを7、8人で取り囲んだ。大浦さんからビーチコーミングの説明の後、テーブルごとに一人15秒の自己紹介をしてから始まった。ビーチコーミングとは海岸で、櫛（コム）で

くしけずるようにいろいろなもの探し集めることだそう。テーブルの上にあるものは、大浦さんが海岸で見つけてきてくださった。

貝殻の紹介。傘のような形の貝は、カサガイ（わかりやすい!）、富士山のような形の貝は、フジツボなど、映像を見ながら教えていただく。貝には大きく分けて 2 種類あり、口が違う。巻貝の多くはギザギザした舌を持ち、藻類を食べる草食系と、他の貝や生き物を食べる肉食系がある。二枚貝はおもにプランクトンを食べる。アサリをよく見ると 2 つの水管を持つ。1 つは水と一緒にプランクトンを取り込み、もう 1 つは水をはき出すためだそう。よく見ると取り込む水管の先にはひらひらがついているので、アサリを食べる前によく見てください、とのこと。トコブシもあった。アワビとの違いは穴の数で、アワビは穴が 4 つ、トコブシは 7 つ前後で、アワビより多いそう。これも魚屋さんで観察して、と言われた。

テーブルにはウニの骨格もいくつか乗っている。バフンウニのきれいなこと！くすんだ緑色で、宝石のようなつぶつぶがついている。よく見ると無数の穴があいてメッシュ状になっている。この穴はトゲが出るところかな？と思ったが、トゲの方はつぶつぶの上についていて、無数の穴からは管足という足が出て、移動に使うそう。この足はいつも出ているのではなく、必要時に水を注入して長くするらしい。またウニの殻の上と下には穴があいている。下のほうが大きい穴で、口。上の小さい穴は排泄用だそう。これに対して、もう一種類、カシパンという種類のウニもあった。表面にヒトデのような、サクラの花のような模様があるきれいなウニだ。こちらには下の真ん中に一つ小さな穴があるが、上にはない。よく見ると脇の方にほんの小さな穴があいている。これも、真ん中の穴が口、脇の穴が排泄用だそうだが、排泄口が脇の方にあるので、一定方向にしか動かないとか。

サンゴは沖縄の宮古島からのものさそう。キクのような模様が実に細かくて精緻だ。サンゴは群体だと思っていて、テーブル上のほとんどのものはそうだったが、一つだけ、単体のサンゴというのがあった。そのような生き方をするサンゴの存在そのものを知らなかったので、びっくり。見た目はそれほどかわらないのに・・・

丸くて持ち重りのする石もあったが、これは子産石。逗子の海岸の崖から産出されるノジュール（石灰質団塊）というもので、まんなかに化石が入っているそう、実際この石を割ったものも回覧され、貝の化石が入っていた。

人間が作ったものに、漁網の錘、浮きなどがあつた。その他プラスチックのパイプなど用途のわからないものがあつた。これは瀬戸内ではどの浜でも必ず見つかり、関西方面の人にはけっこうなじみのもので、カキの養殖（広島県）に使うホタテガイをとめるためのものさそう。カキの養殖場ではこのパイプ類の回収がかなり問題になっているらしい。

自然の不思議から人間の営みまで、多くのことを教えていただいたワークショップだった。貝殻とサンゴはお持ち帰り OK ということで、一番気に入ったものを熱心に選んでいく参加者もいた。まさに海からの贈りもの。次回は自分で浜辺を歩いているんなものを探したい。

（文責 小川真理子）